

新春の御礼の中に云はく、駿河国実相寺の住侶尾張阿闍梨と申す者、玄義の四の巻に涅槃経を引いて、小乗を以て大乘を破し、大乘を以て小乗を破するは盲目の因なりと釈せらるゝの由申し候なるは実にて候やらん。

反詰して云はく、小乗を以て大乘を破し、大乘を以て小乗を破するは盲目ならば、弘法大師・慈覚大師・智証等はされば盲目となり給ひたりけるか。善無畏・金剛智・不空等は盲目と成り給ふと殿はの給ふかとおつめよ。玄義の四に云はく「問ふ、法華に麤を開するに麤をして皆妙に入る。涅槃は何の意ぞ更に次第の五行を明かすや。答ふ、法華は仏世の人の為に権を破して実に入る。復麤有ること無く教意整足す。涅槃は末代の凡夫の見思の病重く、一実を定執して方便を誹謗し、甘露を服すと雖も事に即して而も真なること能はず。命を傷ひ早夭するが為の故に、戒・定・慧を扶けて大涅槃を顕はす。法華の意を得る者は、涅槃に於て次第の行を用ひざるなり」と。籤の四に云はく「次に料簡の中、扶戒定慧と言ふは、事戒・事定・前三教の慧並びに事法を扶くるが為の故なり。具には止観の対治助開の中に説くが如し。今時の行者或は一向に理を尚ぶときは則ち己聖に均しと謂ひ、及び実に執して権を謗ず。或は一向に事を尚ぶときは則ち功を高位に推り、及び実を謗じて権を許す。既に末代に処して聖旨を思はずんば其れ誰か斯の二の失に墮せざらん。法華の意を得るときは則ち初後俱に頼なり。請ふ、心を揣り臆を撫で自ら浮沈を曉らん」等云云。此の釈に迷惑する者か。此の釈は所詮或は一向尚理とは達磨宗に等しきなり。及び執実謗權とは華嚴宗・真言宗なり。或は一向尚事とは浄土宗・律宗なり。及謗実許權とは法相宗なり。夫法華経の妙の一字に二義有り。一は相待妙、麤を破して妙を顕はす。二は絶待妙、麤を開して妙を顕はす。爾前の諸経並びに法華已後の諸経は破麤顯妙の一分なり。之を説くと雖も開麤顯妙は全分之無し。爾るに諸経に依憑する人師は彼々の経々に於て破顯の二妙を存し、或は天台の智慧を盗み、或は民家に天下を行なふのみ。設ひ開麤を存すと雖も破の義免れ難きか。何に況んや上に挙ぐる所の一向執權、或は一向執実等の者をや。而るに彼の阿闍梨等は自科を顧みざる者にして嫉妬するの間、自眼を回轉して大山を眩ると観るか。先に実を以て権を破し、権執を絶して実に入るは、釈迦・多宝・十方の諸仏の常儀なり。実を以て権を破する者を盲目と為ば、釈尊は盲目の人が、乃至天台・伝教は盲目の人師な

るか、如何。笑ふべし、返す返す。

四十九院等の事。彼の別当等は無智の者たる間日蓮に向かって之を恐る。小田一房等怨を為すか。弥彼等が邪法滅すべき先兆なり。根露るれば枝枯れ、源竭くれば流れ尽くると云へる本文虚しからざるか。弘法・慈覚・智証三大師の法華経誹謗の大科、四百余年の間隠せる根露れ枝枯るゝなり。今日蓮之を糺明せり。拘留外道が石と為って数百年、陳那菩薩に責められ、石即ち水と為る、尼毬が立てし塔は馬鳴之を頽す、臥せる師子に手を触れば瞋りを為す等是なり。

建治四年正月十六日

日 蓮 花 押

駿河国実相寺豊前公御房御返事